

教員志望の大学生はなぜ英語教師をあきらめてしまうのか —自ら進路を考え・決めることができる問診票作成のために—

秋 山 朝 康 (文教大学文学部)

渡 辺 敦 子 (文教大学文学部)

大 場 博 幸 (日本大学文理学部)

Why Do English Teacher Candidates Give up Becoming an English Teacher?:
A Development of Self-Diagnostic Check Lists for Enabling University Students to Think
about and Make Decisions about their Future Careers

AKIYAMA TOMOYASU, WATANABE ATSUKO

OHBA HIROYUKI

(Faculty of Literature, Bunkyo University)

(Faculty of Literature, Bunkyo University)

(College of Humanities and Science, Nihon University)

要 旨

本研究の目的は教員を目指している学生が自身で進路を考え・決めることができる問診票を作成することである。2つの先行研究（英語教員になった学生の大学生生活の調査 [研究1] と教員になる主な要因 [研究2]）の結果をもとに、本研究は教職課程を諦めた8人の学生にインタビューを実施し問診票を作成するヒントを探った。教員を諦めてしまう要因には学生が持っている教師像の強さの度合いに関連している可能性があり、それは教師という職業に対する意識の違いによるものかもしれない。

1 研究背景と研究の目的

大学全入学時代と言われてから10数年経ち、大学は学問を提供する学び舎だけでなくその他の役割（例えば進路指導、生活指導・カウンセリング）も求められるようになった。進路指導でいえば、多くの大学は1年生から様々なオリエンテーション・適性検査など実施され入学から卒業を見据えて指導することはあたりまえのようにになっている。

本研究の目的は教員を目指している学生が自身で進路を考え・決めることができる問診票を作成することである。この研究の背景は、英文科は文教大学越谷校舎文学部に所属し、毎年若干の差はあるものの入学時の教員志望

率は約8～9割に達する。ただし卒業時に教職免許を取得する学生の割合は4～6割に減少し、実際教員採用試験を受験する割合はこれからやや減少する。つまり約半数の学生が入学時と異なる進路を選択する。

教員志望者の中には教員免許取得だけを目的とする学生がいる。その一方で、教員を目指してきたが在学途中で教職を諦め進路変更をする学生も少なからずいる。いろいろ悩んだ末の決断であろうが、一生懸命やってきた学生であればあるほど、「いつ・どんな理由で教職を諦めたのか、そして納得できるような進路を選んで卒業できたのか？」など学科としても調査すべきことがある。

教職を目指し入学した学生が自ら進路選択を考え・決めることをサポートしたいというのがこの研究の初動機だった。その時に思いついたことは他の大学ではなく英文科の学生に適したテラーメイドの「問診票」を作成することであった。問診票のイメージはこれこれの症状があればこの病気の可能性が高いというような、ともすれば不安を増大させるものもあるが、我々の意図は違う。例えるならば医者いらずの問診票で、自ら学生が進路を考え・決めるきっかけを提供し、お互いに励ますことができるようなものを作成したいと我々は考えた。足場架けのような問診票である。

問診票作成の手掛かりを見つけ出すために、これまで我々は2つの研究を実施した。一つは卒業生数百人へのアンケートを実施し（研究1）、英語教員とそれ以外の仕事に就いた人の学生生活、成績、課外活動、アルバイトの経験有無はどのような関係があるか調査をした。二つ目は卒業生で現役英語教員へのインタビューを実施し分析した（研究2）。どちらの研究も教師になった人の要因を探り問診票作成に生かすのが目的だった。そしてこの研究でさらに必要なことは問診票に含めるチェック項目を新たな視点で見つけることである（研究3）。具体的には在学中に教職を諦めた学生へのインタビューである。主な理由は研究対象を変えることで研究1と2と異なるチェック項目を問診票に加えることができると考えたからである。

本論文の主な構成は1) 研究背景と目的、2) 研究1（量的分析）研究2（質的分析）の結果のまとめと示唆、3) 本研究課題と結果報告、4) 考察と結論、5) これからの研究の示唆である。

2 先行研究

2.1 教師の資質について

教師の資質能力に関する多くの研究は行

われているが、その特徴的な点として次の二点が挙げられる。まず一点目は資質能力研究の多くが現職教員を対象にしており教職課程に在籍する学生に関しての研究例が少ないことである（Nagamine, 2008; Yoshimoto-Asaoka, 2015）。著しく変化する教育現場（e.g., 大量退職/採用、新学習指導要領施行、ICT）など、益々多様化する教育現場に対応する教師の資質能力の育成は就職後からではなく、教職課程履修時から始まるべきだという考えが一般的になっている。つまり、大学在学時に彼らが何をしてそのような資質能力を身に着けることができるのかを探究している研究はあまり見られない（姫野, 2013）。二点目は既存の枠組み（フレームワーク）を使用している研究が多いことである。教職課程に在籍している学生を対象にした研究も現存するが（姫野, 2013）、その多くが既存の枠組みを通しての研究になり、その中の項目間の相関関係等を分析し、枠組み自体の研究となっている。

本研究は教師志望の英文科の学生が自ら進路を考えるきっかけを提供する問診票作成のために、教師の資質に関する既存の枠組みを使用せず、現職教師が大学時についての語りの中から資質を見出す。これは三上（2017）が指摘しているように質的データ収集・分析からは既存の枠組み内の項目等からは見られないことが浮かび上がると考える。

2.2 研究1 教師になることと在学中の生活で何がわかるのか（量的分析）

大場・渡辺・秋山（2020）が調査対象としたのは、2011～14年度に英文科を卒業し、かつ現在の住所のわかる509人に対して往復ハガキにてアンケートを用い、約2か月間かけて実施した。また、インターネットを通じた方法も選択できるようにした。有効回答率はおおよそ23%で、アンケートの主なチェック項目は在学時の教職の意思有無・理想の教師像、

アルバイトの経験・成績などであった。以下に本研究に特に関係がある結果について述べる。

第一に、在学時に理想の教師像を保持していることが関係している。特に、教職志望者においては、他のチェック項目との関係と比べて最も高い。理想の教師像を持つことがなぜ教職就職に有利な条件となるのだろうか。考えられるのは、モチベーションの維持に役立っているからである。それが努力目標として機能するという可能性である。身近でかつ親しみやすい存在であるため、努力によって自らイメージする理想に近づけると学生らに思わせる効果があると推測される。この推論の正しさを判断するには、どのような像であれ理想の教師像を持つことが重要なのか、それとも特定のタイプの理想像が特に教職に就くことに関連するのか、それはどのようなタイプなのか、明らかにしておく必要がある。

第二に、「熱心に取り組んだ課外活動」については、項目によって影響が異なる。サークル、ボランティアについては教職就職にほとんど影響がないか、またはプラスの影響があると推測できる。アルバイトについては、入学時教職志望者と教職「非」志望の学生とでは影響の出方が異なる。それは前者にとってはマイナスに、後者にとってはプラスに働く。したがって、アルバイトについては、一方向への影響があるわけではなく、回答者の属性に左右されるものであると考えられる。入学時教職志望者においては、アルバイトの経験は教職以外の職業の魅力を知る経験となり、教職への意欲をクールダウンさせるのかもしれない。なお、今回のアンケートではアルバイトの詳細については立ち入って尋ねていない。アルバイト内容によって教職就職への効果が変わる可能性があり、さらなる検討が必要だろう。

第三に、在学時の成績は影響しない。これは英語関係の成績に限っても、成績全般に限

っても同様であった。一つは、教員の採用は意欲や就職試験に向けた対策の問題であり、それは大学での英語成績と異なっているのみならず、それと反するものであるという可能性である。したがって、大学時代の勉学の時間を削って、教員採用試験を優先し、それに向けて戦略的に対応してきた層が教職に就いた、その結果だということとなる。二つめの理由は、このアンケート調査では、客観的な成績を把握できなかった可能性がある。自分の成績について回答者は、自分の英語成績を「まあまあ」だと回答しがちとなる。あるいは、回答者は他の学生の成績を分かっているわけではないので、自分の相対的な位置をわかっておらず、控えめな回答をしてしまう。いずれにせよ、さらなる検証が必要だろう。

第四に、教職を諦める時点は、およそ3/4が学生時代で、およそ1/4が卒業後となっている。新卒採用が主流となっている現在の日本においては、学生時代に進路を決めず、卒業後非正規雇用のままであることにはキャリア形成のうえでリスクがある。教育機関としては、非常勤講師となった卒業生のケアについては検討を要する。

英語教師への就職に影響のある大学時代の経験として、第一に理想の教師像を持つこと、第二にアルバイトに熱心に取り組む経験は、学生が入学時に教職志望かどうかによって教職就職にプラスにもマイナスにも作用する。ただし、その理由についてはさらなる検討が必要である。また、サークル活動やボランティアに熱心に取り組むことは、大きな影響を持たないことがわかった。さらに、学生時代の英語科目の成績や全教科の成績は、教職就職との影響を持たなかった。加えて、教職を断念する時期は多くが学生時代であるが、卒業後も非常勤などを続けて最終的に断念するケースがあることもわかった。

研究2 現役英語教師へのインタビュー結果

渡辺、秋山、大場（2019）は英文科を卒業し現役英語教員になった先生方にインタビューを実施しさらに深く調査することを目的とした。

インタビューは2017年10月から2018年2月の間に現職英語教師6名を対象に約45分間行われた。インタビューの目的は研究1のアンケートではわからなかったことを深く掘り下げることであった。具体的には「教員採用試験合格において役に立った事」「教壇に立った今何が役に立ったか」等の具体的な質問をした。インタビューは非構造化形式で行われた。データ分析のために参加者の同意を得てインタビューは録音された。6人の教員は教員経験4年以内の比較的若い埼玉県の中学校の英語教員であった。その理由は学生時代の記憶が比較的是っきりしているからである。以下にインタビューを分析した主な結果を述べる。

第一はどんな教師になりたいかイメージができてきていることである。ほんやりと教師になりたいと思うのではなく自分が成りたい教師のイメージが具体的かつ肯定的であることが挙げられた。インタビューに答えた現職教員の全てが、憧れの教師の存在、または家族が教師と身近にモデルとなる教師が存在していた。そこで教師に対して具体的で肯定的なイメージを描くことができ、これが教職を目指すひとつの大きな契機になった可能性が挙げられる。インタビューを受けたある先生は、高校時代ずっと引きこもっていて、担任の先生が何度も家庭訪問をして助けてくれたことがきっかけになり、「私も一人でも多くの生徒に寄り添う先生になりたい。」と述べた。

第二に人間関係を築くことの大切さを意識したことが共通していた。インタビュー参加者が学生時代に行ったことで教員になるにおいて役にたったこととして、ある特定の授業を履修したということよりは4年間通して続

けたアルバイト、サークル活動、教員採用試験に向けた学生間で任意に形成された長期的な勉強会など、ひとつの事を長期間、他者と関わりながらやっていくことが挙げられた。そしてインタビューを受けた複数の教師が同じサークルに所属しながらアルバイトをして、教員試験の勉強を行っていたようだ。ここから困難、苦難を他者との協力、励まし合いの中で辛抱しながら最後までやり遂げたということが見えてくる。彼らは長期にわたる人とのやりとり、付き合いを自分の成長における重要な要素として見なしているようだった。特に今まで自分が苦手だったこと、例えば、異性と話すこと、人前で話すこと等を学び、克服することを可能とした場として捉えているようだった。

ここで二つの研究結果から早急に結論を出すことは控えるべきだが、今回の研究で少なくとも教員の資質への手掛かりとなる知見を得ることができた。それは以下の2つの共通項である。

- 1) 教師になりたい強い志望動機をもって自分がなりたい・憧れる理想の教師像を入学時にすでに持っている。
- 2) 学生時代にアルバイト、サークル、勉強仲間など人との関係を大切に思っている。

1) に関して、教員になることに強い意志をもっておりかつ具体的な理想の教師像で成り立っているものかもしれない。そしてその理想像（核）がしっかりしていればどんなことがあっても揺るがないものと言えるであろう。インタビューの中の一人は非常勤を4年やっても教師になることは諦めなかった。大学時代、友人が教職を諦めても、自分は諦めなかった。このようにつらいときには自身を支える核になる存在である。理想像は中高の恩師であったり、自分の保護者であったりと様々であった。

上記の研究で一つ見落としていることはこ

れまで教員になったケースを主に研究対象としているが、教員を諦めたケースは触れられていない。具体的には教師を諦めた学生は上記のような理想の教師像は存在しないのか、理想像が存在しても諦めた理由はなにかなど教師を諦めたケースを分析することは問診票を作成する際に多くの手掛かりを我々に提供してくれると考えた。さらに本研究結果と以前の研究結果を比べることによって問診票に加えるべきチェック項目がよりはっきりと見えてくる可能性がある。

3 本研究の課題と結果報告

3.1 本研究の課題

本研究の目的は問診票に含めるチェック項目を教師を諦めた学生のインタビューから得ることである。研究課題は以下の2つを設定した。

- 1) 教師志望の学生はどのようなことがきっかけで教師を志したのか？
- 2) 教師を諦めたのはいつ頃でその主な理由は何か？

データ収集は英文科に所属し教職課程を諦めた8人の学生（教職を諦めたが免許を取得することを放棄していない場合も含む）に、秋山・渡辺が約30～40分間インタビューを実施した。インタビューは半構造的で、まず、本研究の目的や研究倫理を説明し、1) 教員を目指すきっかけ、2) 教職を諦めた理由やその過程などを中心に聞いた。インタビューはすべて録音され分析のため文字起こしをした。

3.2 インタビューの結果報告

表1はインタビューに協力してくれた8人の性別、当時の学年、教師になるきっかけ、諦めた主な理由を表している。教師を諦めた主な理由を大きく分類すると教師を諦めることの抵抗が少ない（新たな選択の存在、Aと

B／教員と一般企業の狭間、C&D）から比較的強い（現実と理想の教育とのギャップのため挫折、E～G）、その他（H）に分類した。（ここではインタビューを分析して感じたことを便宜上並べたので研究協力者間で厳密に比較したわけではない）

表1 教職を諦めた8人のインタビュー結果

学生	学年*	教師になるきっかけ	辞める主な理由
A(男)	4	塾に通って英語が好きになった。	教師よりも多くの人と接することができる接客業に目覚めた。
B(男)	3	教員は身近にある職業で、一つの選択肢だった。	留学を通して英語を使う職業（例えば通訳やトレーナー）に興味があった。
C(女)	4	中高の時良い先生に出会って私もなりたい。	一般企業と両方やってみたい。（教員やったら戻れない）。
D(男)	4	高校のときに面白い先生がいてあこがれた。	自分の周りの友人は教師としてイメージできるが、自分を教師としてイメージできない。
E(男)	3	なんとなく教員、家族も自分は向いていると言ってくれる。	子供に実際に関わって、子供に影響する責任がもてるか不安になった
F(男)	4	塾でいい先生に出会えて。授業も好きになったこと。	アクティブ・ラーニングで文法を教えるのは難しい。教育実習はきつかったです。
G(男)	4	英語が苦手だったが予備校で英語の面白さを知った。	自分のやりたいことと違うのかな？（労働時間と給料のアンバランスに幻滅）
H(女)	4	教育一家で物心ついた時から教師になると思った。	大学時代、生活のペースが乱れて教師を諦めざるをえない状態だった。

学年=インタビューを実施した学年を指す。

AとBの共通点は教職に興味はあったが、在学中に何かのきっかけで（Aは接客アルバイト、Bは短期留学）教職を諦めたケースである。2年次後半教職よりやりがいのある仕事を見つけてポジティブな気持ちで諦めたケースである。教職を諦める過程を簡単な図で表すと以下ようになる。

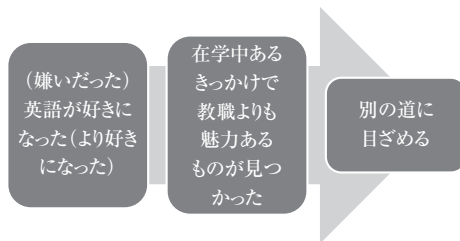


図1 教師を諦める過程（AとBの場合）

インタビューによると中学時、Aは塾に通い英語の先生のお陰で英語が好きになった。それがきっかけで教師に憧れた。もともと接客が好きだったこともあって教師はそのことに合致していた。在学時2-3年の頃、飲食業でアルバイトしたことがきっかけで仕事の面白さに目覚めて教職を諦めたと述べている。Aは「僕は人と接することが好きでそのような仕事を希望していました。教師も魅力的ですが、飲食業はより広く多くお客さんと接することができるしダイレクトに反応があるから好きです。」と述べている。Bはもともと英語が好きで身近な英語教師に興味を持ち入学した。在学時、短期留学を経験してもっと外国語を使った職業に興味を持ったと述べている。どちらも教師は一つの職業で、教職を諦めたことに後悔はしてないと述べたことが印象的だった。これは学生時代にいろいろ経験して視野が広がった例である。

次にCとDであるが、「教師も」一つの選択肢であったことがこの二人には共通している。Cは教員以外に魅力的なもの（航空会社）があったこと、そしてDは最初から教員

の道しかないというわけではなかったし、自分が教員になるイメージを持ってなかったと、述べている。

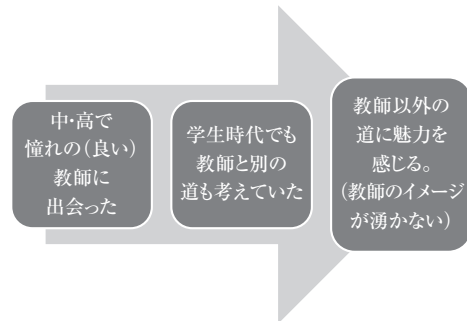


図2 教師を諦める過程（CとDの場合）

以下はCのインタビューのハイライト部分である。

・・・それは教員1本だけに絞れないという気持ちと、あとは他の仕事という職業も見てみたいという気持ちがある。その頃から、最初航空会社とかそういう航空系に興味があって、親戚でそういう方がいてお話を聞ける機会があって、それですごく影響を受けたといいますか、すごく魅力的だなんていうの pensando、就職活動もしてみたいなという気持ちになったのが2年生の頃で。(中略)

・・・いろいろ言ったんですけど、たぶん私の中で一番大きいのは、やっぱりいろんなことを経験したいという気持ちが一番大きいのがあって。なので、先生もさっきおっしゃったように、一回教員になってしまったら、もちろんどの仕事でもそうなんですけど、教員から転職ってあんまり聞かないなというのがある。ただ、一般の企業であったら、何年か働いた後に転職するとかは今の時代だったら結構あるって聞くので・・・
(インタビュー原文)

いろいろな人に会っていろいろな経験をしてみたい思いが強く、教員になってしまったら、他の職業に転職するのが難しいようなので教職を諦めたようである。そしてDは在学時教職の授業を受けたり教育に関するアルバイトをして結局自分は教員には向いていないし、自分が教員になったイメージが湧かないと言った。

もともと先生になりたいっていうのが100ではなかったんですよ。高校からこの大学に入るときに、既に企業に勤めたいなっていう気持ちもともとあったので。だけど一応、どんな世界なのかみたいなのを自分が全部分かってたわけじゃなかったんで、一応、授業とかも受けて、どんなことをするのかとかっていうのを学んでみて、それで判断しようかなと。(中略)これから先、自分が先生になるとしたらどんなふうになるのかなとかって想像して、見えなかったんですよ、やっぱり。イメージが。
(中略)・・・あとはやっぱり、教職って結構忙しいじゃないですか。できる人はできると思うんですけど、中には多分それだけしか考えられない人ってすごいいると思うんですよ。教職で教員のことを勉強して、教員のことだけ勉強した状態で先生になりましたといっても、それだけの人になってしまう人も中にはいるんじゃないのかなって・・・。(インタビュー原文)

次に教師を断念することで悩み、それ故、その決断することに抵抗があったであろうグループ(E, F, G)を述べる。まずEであるが2年後半まであまり悩むことなく教員を目指し続けていた。少し悩んだことはあったようだが、教職を辞めるとは思わなかったようである。それは周りの友人や家族も教員に

向いていると言ってくれたことも関係している。ただ、教育実習の準備や教育関係のアルバイトなど経験した時、自分に直接関わる問題が意識され大きな責任感が重く押し掛かってしまい教職を諦めてしまったケースである。図3はEの教師を諦める過程を表している。

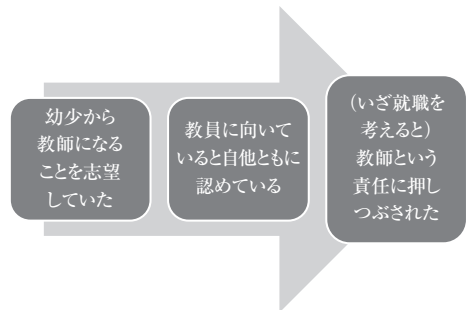


図3 教師を諦める過程 (Eの場合)

幼少から教師になりたいという思いもあったし、周りの家族や友人にも教師に向いていると言われ続けていたので教師になることを疑わなかった。そして在学中に学童で児童・生徒と触れ合う経験をした。その時、教師は生徒の人生に影響を及ぼすことを実感し、自分がその責任を果たしていけるかどうか悩み、このまま教職を続けるか悩んだようである。Eは以下のように述べている。

家族だけじゃなくて学校の先生からも教員いいんじゃないみたいなことを言われてたんで。それがどういう気持ちの重さっていうか、その程度は分かりませんが、軽い気持ちなのか、本当に思ったのかはちょっと分かりませんが、今までそういう、言われることが多くて。(中略)

・・・、ずっと小学生、幼稚園児と小学生の放課後等デイサービスっていう施設で指導員としてアルバイトしてて、子どものお世話をしたりもしてたんですけど。

そういうときにやっぱり教育についてしっかり考える機会っていうのがあって、考えてるときになんかやっぱり自分、教師っていうのは本当にその子の将来っていうか、をしっかりと決めてしまうっていうときもある責任感っていうのが本当に重くて、自分にちょっとそれが耐えられるのかっていう感じで。(インタビュー原文)

次にFとGに共通していることは教師を志望したきっかけは英語が不得意な自分を英語が好きにさせてくれた教師に憧れたことと、諦めた時期が4年生になってから、そして理想と現実とのギャップに挫折したことである。図4教師を諦める過程 (F・Gの場合) を表している。

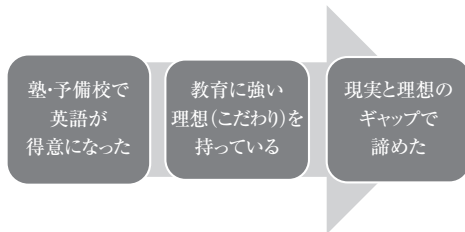


図4 教師を諦める過程 (F・Gの場合)

Fのきっかけは予備校で出会った先生の授業が楽しくていつのまにか英語が得意になっていた。その先生は論理的に丁寧に文法を教えてくれた。こんな先生になりたい。Fは教師を志望し、英文科に入学し教職を勉強し始めた。そして在学中に学習指導要領が大きく変わった。自分が教壇に立つ頃はアクティブ・ラーニングが中心になり、自分の英語力でやっていけるのか不安になったという。そして、予備校で教わったような授業はできないと思い教職を諦めたということである。Fは自分が描いている理想の授業とのギャップで諦めた。Gもぎりぎりまで悩んで結局は一般企業に舵を切った。その主な理由は教育実

習で実感した教員のハードなスケジュールであった。Gは実習まで採用試験の勉強もしていたし、実習中は野球部の顧問を補助し積極的に生徒に関わっていた。以下はGとI (インタビューアー) とのやり取りの一部である。

I : なるほど。それで決定的なことは何でしたか。あなたにやめさせるような。

G : 労働環境と対価です。

I : 対価? もっと詳しく。

G : 普通の会社員の人って8時間労働じゃないですか、1日。残業したら残業代が出るじゃないですか。でも、教員は。自分の母親もそうなんですけど。

I : そうなの?

G : 母親も父親もそうですね。(中略) はい。企業の人は8時間労働って言ったと思うんですけど。まず朝8時ぐらいに学校に行って、ずっと授業をして。8時だから。でも結局、学校に部活指導もして8時、9時ぐらいまでいたんですよ、実習中に。12時間労働じゃないかと思って。しかも、授業の準備も家でやらなきゃいけない。これは残業代が出ないじゃないですか。

実習中お世話になった先輩教師は朝早くから夜遅くまで指導をしている。その教師にとってはこんなことは当たり前のことだという。その時Gは教師の労働環境を実感し挫折した。教師の労働時間を考えたらその対価は給料に反映されていないということで諦めたということであった。

最後にHの場合は我々がよく耳にするケースだった。入学当初、Hはサークルやアルバイトを一生懸命にやっていた。1年の頃はまだそれほどでもなかったが2年の頃から上記のことが忙しくなり授業を欠席するようになり、結局教職を諦めることになったようである。図5は教職を諦めた過程を表したもので

ある。インタビューではなぜ大学生活が立ち行かなくなったかをHは話してくれた。

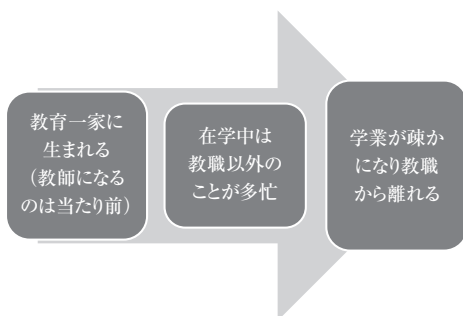


図5 教師を諦める過程 (Hの場合)

・・・結構、みんなHさんちイコール先生んちみたいな感じの所に生まれて、Hちゃんも先生になるんだねみたいな感じだったから。私も両親はかっこいいと思っていたし、自分もちっちゃいときから英語を勉強していたので英語が好きだし。必然的に英語好き、身の回りに先生がいる、だから先生になろうって思って。それで小学校のときも中学校のときも恩師の先生が、先生に向いてるから。(中略)

・・・部活と勉強とアルバイトをやっていたときは本当に楽しくないみたいな。部活は楽しいけど、でも行きたくないし。バイトも疲れるから行きたくないし。課題もあるけど、やりたくないみたいな。家で寝ていたいみたいな毎日で、ずっと。(中略)。もしそこでちゃんと自分で立て直してて。でも、最初はちゃんとやっていたんですよ。できてたけど、部活も面倒だしてなったときにどれかを休みたいってなったら、私は学校を休んだんですね。自分の責任になるから。部活を休むと周りに迷惑が掛かる。バイトも交代がある。(インタビュー原文)

4 考察と結論

なぜ教員を諦めるのか (教師を諦めなかったのか?)

インタビューを実施したのが8人という数少ない中で結論づけるのは早急であるが、それでもある程度の傾向がわかった。まず教職を諦める理由は大きく分けて肯定的 (諦めることの抵抗感が少ない) から否定的 (抵抗感がある) と考えられる。厳密に言えば人数分の諦める理由があると推測されるが、それはこれからインタビューの人数を増やして調査する必要がある。

諦めた学生の多くに共通していることは教員 (教職課程) に対する意識ではないだろうか。それは「教員という選択肢もある」と「教員という選択肢しかない」の違いなのではないだろうか。在学中教員よりも他に魅力のあるものに出会った学生のケース (AとB) は教師に憧れて入学したが在学中に興味ある仕事が見つかったので教職を諦めたというケースである。この二人から教師が唯一の選択肢ではなかったことがインタビューから伺えた。CとDは教員も選択肢であったがもっとはっきりとやりたいことがあったと述べていた。教員は一般企業に比べると特殊な仕事 (時間の束縛・閉鎖性) というイメージがあったので自分に適した職業ではないと考えていたようである。それでも教職を選んだ理由は教師を目指して入学したので教職課程を経験したいということだった。そこにはどこまでも教員でなければならないという意味はなかった。他の職業の意識が強く教員という職業も知っておきたいという感触であった。まさに教員は選択肢の一つに過ぎなかった。

否定的な理由で諦めたケースの一つは、憧れであった教員がだんだんと現実化してきて自分は本当に適しているのか不安になり自信を失うケース (E) で、もう一つは理想とのギャップに悩み・絶望し諦めた場合 (F・G) である。前者は周りの友人・保護者も教

員に向いていると言われて尚更自分が教師になることを疑わなかった。いざ教師になる大詰めに来た時に教師になることが重くのしかかってきた。このとき初めて「自分は教師に向いているか？生徒を一人一人導くことができるのか」など自問していく。これまでにない圧迫感だったに違いない。教師になるのが当たり前だったのが不安になり自信を失った。Fの場合は自分が抱えている理想の授業と現実で求められている授業とにギャップがあった。英語で教えなければいけない自分の英語力不足を考えると自信がなくなる。何よりも自分が予備校で教えてもらったような理想の授業はできないという絶望感だった。Gのケースはこれだけ教師が働いても残業代がないという厳しい労働環境を経験し、対価が伴っていない現実に絶望して諦めたケースであった。このグループとのインタビューでは「自分には教員という選択肢しかない」ということは誰も言及はしなかった。どちらかと言えば理想・憧れていた教員のイメージが崩れてしまったから進路を変更してしまうのではないということだった。

研究1と2と本研究の焦点の一つは理想の教師像の有無は学生が教師を諦めるのにどの程度影響するかであった。理想像をもっていない学生は理想像がある学生よりもやめる傾向があるかであった。この段階で本研究の結論を出すのは無理であるが、インタビュー結果からみるとどの学生もきっかけは教師に憧れていて、モデルのような教師は身近にいたように思えた。そうすると両者の違いは教師像の有無というよりは教師像の強さではないか。強さとは言い換えれば、「教員は唯一の選択肢なのかどうか（職業観）」ということである。あくまで推測の域は出ないが、「教員の選択肢しかない」はそれだけ教師になりたいという強さと関係しているかもしれない。「なんとしてもあのような先生になりたい」という自分が目指す理想像がはっきりとして

いるから教員という選択肢しかないのかもしれない。例えばGが教師しか道がなかったならば、労働と対価の関係は言ってもしょうがない、つまり諦めていなかったのではないだろうか。一言でいうならば、教師に対する意識の強さの違いだろうと考えるが、このことはこれからの研究に委ねる。さらにこのことに加えてFとGの事例をとると、あまりに自分の理想の授業やこだわりが強すぎると、現実と理想とギャップの差が大きく、心折れる可能性はあるだろう。しかしこれは研究2と研究3の両者を比較したわけではないので今後さらに上記のことがあてはまるのか検討する必要がある。

問診票へ含むチェック項目の手がかり

研究3では問診票へ含むべきチェック項目がいくつか存在した。以下のチェック項目は研究1&2で見出すことができないものであった。

- ・在学中、一般企業と教員両方を志望している。
- ・教員はブラックな仕事だと思う。
- ・教員は責任を伴う仕事なのでプレッシャーに感じる。
- ・中高生時自分が受けてきた英語の授業と現状にギャップを感じる。

例えば、「現在一般企業と教員両方を志望している」は「教員も選択の一つであった」や「教員100%じゃないんです」などの発言から考えられたものである。また、教員はブラックな仕事などは教師になった人からこのようなヒントを得ることは難しかっただろうし、新学習指導要領の改訂の影響で自分の理想とする授業や労働環境に関するものは現在の学生の考えを反映していると考えられる。

5 これからの研究の示唆

我々の研究の目的は学生自ら進路を考え・選択できるように手助けする問診票を作成す

ることだった。そのために研究1はマクロ的視点で数百人規模の卒業生で教員になった学生生活のイメージを明らかにし、研究2はミクロ的視点で少人数の現役英語教師にインタビューを実施した。2つの研究に共通していることは教師になる人の特徴として理想の教師像の有無、そして本研究では学生が持っている教師像の強さの度合いが諦めることに寄与している可能性があり、それは教師という職業に対する意識の違いかもしれないということであった。勿論二つの要因が関係していることは想像できるが、例外はないのか、二つの要因がどのように関係しているかなど研究を要する課題は多くある。さらにインタビューを増やし、上記以外の理由で教師を諦めた理由を調査する必要がある。

さらに2つ問診票に関して、2つ教職を志望する学生に関して可能性のある課題を挙げる。

- 1) 問診票を実施する時期はいつからが適切なのか? : 入学後の経験に左右される可能性があるとするれば、問診票を実施する時期は、入学時ではなく二年から三年時がよい。かつ、重要だと考えられる経験をすでにしているかどうかを尋ねる項目も織り交ぜたほうがよいであろう。なぜならば学生の決断の説得力を判定できる)、
 - 2) 理想の教師像が教免課程の継続にどう繋がっていくのかを調査する必要がある。
- 1) 教免課程を続けるか否かの決断に影響する情報や経験を、学年の早い段階で経験してもらうにはどうしたらよいか?
 - 2) (入学時に将来性を把握したい場合)、教免課程を続けるか否かの決断に影響する情報や経験と関連する資質というものはあるか?

最後にこれから教師を目指そうとする学

生へ問診票を実施する際には、問診票のチェック項目をさらに検討することと、そして問診票を使用するときに留意するべきである。例えば、玉井 (2019、私信personal communication) の指摘によると、例えこの問診票の意図は違っていても、学生は問診票にチェックするにしたがって「私はもしかしたら教員に向いてないような気がする」との考えになり、結局はチェック項目にあてはまらない学生を排除することになってしまう可能性があることを指摘した。このようなことにならないように我々は十分対処する必要がある。チェックしてその症状にあてはまる病気に見当をつけるのは問診票の宿命であるが決して学生がそのような感情を持たないような工夫は必要である。今後は上記のことに配慮しこれからパイロット研究を実施して修正に修正を重ねる必要があるだろう。

参考文献

- 大場博幸, 渡辺敦子, 秋山朝康 (2020) .「英語教師の大学での経験 : アンケート調査からわかる学生時代の過ごし方」『湘南フォーラム』No.24,pp 41-52.
- Nagamine, T. (2008) . *Exploring preservice teachers' beliefs*. Germany: VDM Verlag Dr. Muller.
- 姫野完治 (2013) 『学び続ける教師の養成 成長観の変容とライフヒストリー』大阪大学出版
- 三上明洋 (2017) .「アクション・リサーチの実践が英語教師の専門能力に及ぼす影響—質問紙調査に基づいて—」『中部地区英語教育学会紀要』Vol. 46, pp269-276.
- Yoshimoto-Asaoka, C. (2015) Mitigating the disparity between theory. Unpublished Ph.D. thesis. University of London.
- 渡辺敦子, 秋山朝康, 大場博幸 (2019) 「英語教員志望学生のための資質診断書開発 : 質的分析から見えてくる資質」『教

育研究所』 Vol 28, pp99 - 106

補足資料

玉井健 (2019,2月25日). アンケートの作成の
仕方 (私信) 高知リハビリテーション専
門職大学に於いて、インタビューから